

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

すまいるたうん



汐入



第131号

平成22年

1月23日

三々輪橋界わい

平成22年9月

第1回

んがテレビにて三平さんの父林家正蔵師匠の話としておられました。

ちなみに明治になり市制が施工された時、

ジョイフル三ノ輪商店街の「ナガオカ」の五十嵐春雄さん（大正14〜平成19）の遺稿集「三ノ輪橋界わい」「ジョイフル

三ノ輪今昔物語」「三ノ輪橋界わい名跡散歩」が藤野青果さんで見つかりました。月1回連載致します。

俳聖松尾芭蕉は、元禄二年深川芭蕉庵から船に乗り曾良を伴い隅田川をのぼり「千住という所より船をあげれば前途三千里のおもい胸をふさがりて幻の巷に離別の泪をそそぐ」「行く春や鳥鳴き魚の目は涙」所謂奥の細道吟行三千里の一番はここ千住（千住大橋を渡った所）に始まります。この句は船上にて泪橋近くで詠んだのであろうか。

泪橋の名称は、この句にちなんで作られたのか又、橋のたもとで吉原という苦界に身を沈める娘が親と別れる為涙した所からこの名がついたのか定かでない。この泪橋の下を流れていたのが音無川である。当時、数多くの河川とその支流が東京湾や隅田川にそそいでいた。音無川は、秩父に源を發し王子を経て根岸の行の松近く流れていた。これに就いては、故林家三平さんの奥様の海老名香葉子さ

音がテレビにて三平さんの父林家正蔵師匠の話としておられました。音無川は根岸を経て大関横街あたりより常磐線ガード手前の遠藤メガネ店の前を通り、日光街道を横断して浄閑寺裏を流れ（現在、日光街道に三ノ輪橋の道標あり）山谷堀に行き、浅草川と名を変え泪橋の下を通って隅田川にそそいだのであります。前述の音無川が日光街道を横断する折、その上に架けられたのが三ノ輪橋であり（長さ五間四尺巾三間）それは始め、木造であつたが後年コンクリートに変わり暗渠によつて今ではその姿は見られない（三ノ輪橋の写真は現存しております）日光街道は、その当時より道巾が狭くジョイフル三ノ輪の道巾より少し広い程度で、大関横丁より北千住に向い旧南千住警察署の前を通り素蓋雄神社（天王社）に突き当たり右折し神社に沿って左折したのが旧日光街道であり千住大橋渡ると右側にガソリンスタンドがあります。それに沿った道は旧日光街道でその道巾が三ノ輪橋附近の道巾と考えられます。後に日光街道の拡張工事が行われ素蓋雄神社の鳥居も二回に至り内に引込めることとなり、その工事現場の写真が現在東町会会長の松田氏宅に祖父である松田菊蔵氏を中心としたものが現存しております。その工事によつて現在の様に真つすぐになり眞養寺が右側に左側が墓地という珍現象が現れたのであります。

三ノ輪橋手前から千住大橋迄は下谷区（現在台東区）通新町となりましたが大正十二年、荒川放水路が完成するまでは度重なる水害と貧農が多く地域住民の陳情によつて明治廿二年頃、税金が市より安い北豊島郡南千住町（箕輪村）に戻り荒川区が誕生する迄それが続きました。

余談になりますが、私の子供の折（六十年位前）円通寺裏の風見酒店の前を通り、千住製絨所（通称 ラシヤ場）の横を突つきつて隅田川に水遊びによく参りましたが、風見酒店の二階の軒先に二米位の和舟が吊るしてありました。之も隅田川の洪水に備えてのその名残りと思います。之も少したつと姿を消しました。吉原土手というのが六十歳過ぎの方は良く耳にされた事と存じますが、遠藤メガネ店の前は台東区根岸であり箕輪橋から右に曲がった所から土手になり、大関横丁を左折して音無川に沿って吉原方面に続き吉原の迎え柳あたりまでが通称吉原土手があり、そこを徒歩や駕籠で吉原通いをする客で賑わつた事と思います。この吉原土手の為、根岸方面は隅田川の水難が無く根岸迄が下谷区となった物と思われれます。

すまいるたうんふれあい亭

24日31日（日）PM1時

瑞光ひろば館
2Fで、中村実さんのアコーディオンと共に昭和の歌を歌いませんか。参加無料